あとがき

“環境教育”通巻第6号をおとどけいたします。本号には谷口文章氏の論文が掲載されております。読んでいただいておわかりかと思いますが今までとは少し違った型の論文かと思います。「環境教育」の論文とは何か報告とはどう違うのかなどと編集委員会にも問い合せがあります。環境教育学会としても、“環境教育とは何か”といった定義や位置づけがなされていない現在、編集委員会としても議論はしていますが統一見解には至ってはおりません。人間が何らかのかかわりをもっている環境のすべてが環境教育（学習）の対象であるところまでは一致しております。今までは、人間がかかわった自然環境を対象とした環境教育の論文や報告の占める割合が多かったように思われます。今回のような人間そのものにかかわる論文もこれから増えることを期待しております。環境教育は人間生活にかかわる環境を対象としている以上人間の生き方、考え方などを抜きにすることはできません。この場合、環境教育への位置づけを明確にしていただきたいと存じます。学校教育において、新しい方法論として、ロールプレイとかディベートなどが学習にとり入れられるようになっています。環境教育学会としての環境教育の新しい概念形成のためにも多様な立場からの多様な主張や意見が本誌で論議されることを編集委員一同望んでおります。

環境問題とか自然科学、環境科学といえばそれなりの定義ができます。しかし「教育」という言葉が入ると、教育とはある目的をもった意図的な活動であるため、環境教育の定義は容易ではありません。生き方、考え方自体が問われることになるからです。

環境教育学会の大会でも毎年論議して欲しい問題です。本誌は論文にするか報告にするかは自己申告制になっております。主張や討論がなされていたら論文として、報告は活動記録など気軽に書いていただけたら幸いに存じます。地球規模で考えることは大切なことではありますが毎年学校のプールに発生するトンボの幼虫であるヤゴを人間の利用するプールという施設とのかかわりでその生かし方を考えてみるのもすばらしい環境学習だと思います。

現在、年2回の発行ですがこれを増やしていくためにも皆様の実践報告を短かくてもけっこうですので気軽にお寄せいただきたく編集委員一同お待ちしています。どうぞよろしくお願いいたします。

山田　卓三

編集委員
委員長　山田　卓三
加藤　憲一
金森　正臣
狩山　廣子
北野日出男
木俣美樹男
鈴木　善次
杉浦　嘉雄
東原　昌郎
米田　　健